ジェリーフィッシュ

森田カオル

「甘いもの、好きでしょ？」

彼女は、冷蔵庫から出したチョコレートヌガーバーの一本を男に手渡した。

重い過去を背負った女であった。

アラフォーではあるが、締まった体つきの彼女は、ラフな服装の襟や裾から肌着が見えるのも気にせず、否、むしろ意図的に、男の正面に座った。そして、包装を破いてヌガーバーの端を口に含む。男も倣う。

よく冷えたヌガーバーは固く、歯を立てるのもままならない。

「カチカチだね」男は苦笑した。

彼女は男の手からバーを受け取り、皿の上に置いた。そして空になった男の手を自らの乳房へと導いた。

男は、思いがけず、冷たい感触を感じた。

「冷えていれば、形がしっかりしている。でも、温まると、ベロベロになってどうしようもない」

女の目は、目の前の男を見ていなかった。

「私の心も、バラバラになりかかっているのを、ヌガーを絡めて冷やしてあるだけ。楽しいこと、気持ちいいことのヌガーでね。でもね、もうだめだ。溶けかかってるよ」

彼女はするりと服を脱ぎ、男に腕を回す。

「温かいのを通り過ぎて、熱くてたまらない」

彼女は男に体を預ける。

しかし男は躊躇している。

彼女は切なくて目を伏せる。

「それがあなたの答えなのね。そう……。溶けたら、もう、戻れないのに。心も、体も」

彼女の体が、急に色褪せていく。彼女の体の色素が消えてゆき、皮膚も、内臓も、透明になっていった。

恐慌を来した男の前で、「彼女」の肉体が崩れていく。「彼女」はすでに液化していた。